

第20回群馬整形外科研究会

日 時：2011年9月3日(土)

場 所：群馬大学医学部「臨床大講堂」

代表世話人：高岸 憲二

〈主題 I〉

大腿骨骨折の治療

座長：進上 泰明 (館林厚生病院 整形外科)

1. 大腿骨頸部骨折術後に骨頭骨折を生じた一例

大谷 昇, 後藤 渉, 中島 一郎

長谷川 仁, 大倉 千幸

(群馬県済生会前橋病院 整形外科)

【目的】今回我々は、大腿骨頸部骨折術後に骨頭骨折を生じた症例を経験したので報告する。【症例】79歳女性、H22年3月21日転倒し受傷。右大腿骨頸部骨折を認めた。受傷5日後に手術行った(ユニテック DUAL SC 使用)。術後3日よりリハビリテーション行い、術後1週間で1/2PWB、術後2週間でFWB開始。なかなか歩行が安定せずリハビリを継続した。術後12週で自宅退院となった。その後、定期的に経過観察行っていたが疼痛の訴えなく Xp でも異常所見は認めなかった。H23年5月中旬に自宅の居間で尻もちをついたとのことだが疼痛は5月25日の定期受診時には軽快しており Xp でも明らかな骨折所見認めなかった。6月末より特に誘因なく右股関節痛出現した。疼痛はわずかであり自宅にて経過観察していた。7月6日の定期受診時の Xp で骨頭骨折を認めた。入院後、7月28日に人工骨頭挿入術を行った。術後経過は順調である。

2. 大腿骨遠位骨端線損傷の1例

塩澤 裕行, 金澤紗恵子, 土田ひとみ

原 和比古, 松原 圭介, 小野 庫史

小林 敏彦, 柘植 和郎

(公立富岡総合病院 整形外科)

今回われわれは、大腿骨遠位骨端線損傷(高度転位)の1例を経験した。

症例は9歳、女兒。学校にて友人と遊んでいるとき、友人と衝突し、受傷。歩行不能となり、同日、近医受診後、当院に救急搬送された。受診時のレントゲン上、大腿骨遠位骨端線損傷(Salter and Harris type II) 認めた。遠位骨

片は前方に大きく転位し、高度に短縮していたため、まず同日、無麻酔にて非観血的整復術施行するも整復困難であり、全身麻酔下に脛骨近位に2.0mmのKirschner 鋼線にて直達牽引をかけ整復し、2.4mmのKirschner 鋼線にて経皮的鋼線刺入固定した。

今回われわれは大腿骨遠位骨端線損傷(高度転位)にて整復に難渋した1例を経験したので若干の文献的考察を加え、報告する。

3. 当科における大腿骨骨折に対する Distal Targeting System の使用経験

三枝 徳栄, 澁澤 一行, 進上 泰明

(館林厚生病院 整形外科)

2011年4月~7月までに当科における大腿骨骨折3例に対しての Distal Targeting System の使用経験について報告する。男性1例、女性2例、受傷時平均年齢は82.7歳、大腿骨転子下骨折2例、大腿骨骨幹部骨折1例であった。平均手術時間は1時間9分で、2010年4月~2011年3月までのフリーハンド法での6例の平均手術時間1時間17分と比較し、短い傾向を認めた。また、Distal Targeting System を用いることで、正確なscrew 挿入を可能とし、より強固な固定が得られると考えられた。Distal Targeting System は大腿骨骨折に対しての有用な選択肢の1つと考えられた。

4. 大腿筋膜張筋皮弁により治療した大腿骨転子部骨折術後感染例

増田 士郎, 黒沢 一也, 星野 貴光

(日高病院 整形外科)

骨折の手術後に感染が発生した場合、骨髄炎を伴う皮膚軟部組織の感染壊死が発生し、治療には難渋するものとなる。今回、われわれは大腿骨転子部骨折に対する内固定手術後に発生した感染例に対して大腿筋膜張筋皮弁による再建を行った症例を経験したので報告する。症例は87歳男性、2009年3月右大腿骨転子部骨折を受傷。10日後にTF-nailによる整復内固定手術を行い、独歩可能となり同年7月に自宅退院。同年12月になり右大腿近